

# 令和3年度 学力向上プラン

学校名 中央区立明正小学校

## 学校の教育目標

よく考える子ども なかのよい子ども 健康な子ども

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

### 【学校において育成する資質能力】問題解決学習の過程からの「思考力・判断力」

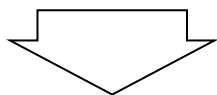
- ・少人数指導や補習教室等で基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。
- ・問題解決学習の学習過程を設定し、思考力・判断力・表現力等を育成する。
- ・自分から進んで課題に取り組むなど、児童の主体的な学習態度を育成する。
- ・児童同士の交流等を通して自他のよさや可能性に気付かせる。多様性や協働性を重視する。
- ・聞く・話す・発表する・まとめる等の言語活動を充実させる。
- ・各教科等との関連を図った教科横断的・探究的な活動、体験的・問題解決的な活動を行い、学び方やものの考え方、表現する力を身に付け、課題を探究する態度や姿勢を育成する。

令和3年度「学習力サポートテスト」や令和2年度学力向上プランの検証結果等の分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	どの学年も全国平均を上回っている。4年は、「書くこと」の領域が区の平均に若干届かなかった。5年は、「話す・聞く」の領域に課題が見られた。	読書に対する関心の個人差が学年が上がるほど大きい。全体的に読書の時間が不足している。文章の論理的な書き方、構成の仕方を学ぶ活動が不足している。 スピーチ活動などを通じた話の論点を明確にした話し方・聞き方の指導が不足している。
算数	どの学年もすべての領域・観点において全国平均を上回っている。一方で集団の中でばらつきがあり、学年の平均を押し上げている大きな集団と、中間層・下位層の小集団との二極化の傾向が見られる。 記述形式の問題の正答率が比較的低い。思考・判断したことを文章に表現することを苦手とする児童が見られる。	上位層の集団と下位層の小集団との2極化の傾向が顕著になりつつある。個に応じた指導の機会が十分とは言えない状況である。 答えを導き出す過程を大事にできていない場合がある。自力解決の際にはノートに自分の考えをしっかりと書かせ、その後に考え方をペアやグループで説明したり確認したり、自分の解法を振り返ったりする活動が不足している。
社会	どの学年も領域・観点を問わず、概ねよくできているが、地図中の8方位を答える問題や地形図を読み取る問題、国土に関する問題の正答率が比較的低い。	教師が知識を教えたり、教科書で知識を確認したりする指導が多く、児童が自ら問題を設定し問題解決的に学習を進める学習過程が定着していない。児童が自ら資料を収集・選択し、活用する場面が十分に設定されていない。 地図から情報を読み取ったり、調べた内容を白地図に表したりする学習の機会が不足している。

理科	<p>4年「風やゴムのはたらき」「じしゃくのふしぎ」、5年「水のすがたとゆくえ」、6年「植物の花のつくりと実」「物の溶け方」の単元の正答率が低かった。</p> <p>全体的に「関心・意欲・態度」が低い傾向が見られる。</p>	<p>自然事象に関する体験が少ない。実際の観察や体験を充実させ、さらに映像や図鑑を活用し、知識・理解を深めていく必要がある。</p> <p>屋上にある花壇の数を増やしたり自由に観察できる時間を設けたりすることで、栽培活動の充実を図る必要がある。</p> <p>授業内で理解する基礎的・具体的な内容の定着で終わることが多い。抽象化・一般化し、さらに多様な内容へ学習の意識を広げたり、関心・意欲・態度を高め継続させたりする工夫が不足している</p>
英語	<p>全体の前で英語を話すことに消極的な児童が見られる。また、新しいフレーズがなかなか定着しない。</p>	<p>知識・技能の定着に個人差が大きいと、発音や表現に対する自信のなさが生まれてしまうと考えられる。中学校への接続を見据え、学年ごとに着実に力を積み重ねていけるように年間指導計画に沿って指導する必要がある。毎時のねらいを明確にしてALTとの事前の打ち合わせを確実にし、T.T指導を充実させる。英語に親しませるだけでなく獲得させる知識・技能を明確にして指導に臨み、評価する。</p>
体育	<p>ソフトボール投げの結果が昨年度の東京都の平均を下回る学年が多かった。特に女子の投力に課題が見られた。</p>	<p>運動量や運動経験に個人差がある。休み時間に進んで校庭で遊ぶ習慣がいない児童がいる。今年度は新型コロナウイルス感染予防対策として外で遊べる機会が少なくなったことも運動量の低下につながった。</p> <p>また、休み時間の遊び内容が固定化し偏りが見られる。ドッジボールやキャッチボールなどボールを投げる遊びをする児童が少ない。</p> <p>体育授業において、運動量確保が不十分である。投げる運動や器械運動領域に苦手意識をもち、進んで取り組むのに消極的な児童が見られる。</p>

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	東京ベーシック・ドリル診断テストの学年正答率を、学年末に80%以上を目指す。読書活動を充実させて、読書量の増加を目指す。
②授業改善	学校評価の自己評価において、授業に関する項目で、A B評価90%を目指す。
③教員の指導力	学校評価の自己評価において、学習指導の項目で、A B評価90%を目指す。
④家庭との連携	学習用具の準備や宿題の達成率を、各学級で学年末に90%以上を目指す。
⑤体力向上	なわとびやマラソン大会における、各種目の記録の向上を目指す。



## 【目標達成のための具体的な取組内容】

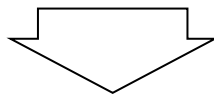
①学力基盤	
取組Ⅰ	基礎・基本の定着を図ることを目的としている週2回の「明正タイム」の時間における、内容や方法を充実させる。
取組Ⅱ	東京ベーシック・ドリルや診断テストを活用し、繰り返しによる学習の定着を図ったり、学習状況を個別に把握したりする。休み時間や明正タイム、水曜日の放課後、個人面談期間を利用して算数少人数担当による個別の指導を充実させる。
取組Ⅲ	校内研究として取り組む生活科・理科の学習を通して、主体的・対話的で深い学びのある授業を目指す。

②授業改善	
取組Ⅰ	「中央区小学校授業スタンダード」を授業設計のベースとし、校内で互いに授業公開を図り意見交換をすることで学校全体の授業力向上を目指す。
取組Ⅱ	校内研究を中心として、問題解決的な学習や学習評価の在り方を共通理解し、各教科の指導に波及させる。
取組Ⅲ	既習事項、身に付けた基礎・基本を活用する場面や考えたことを表現し学び合う場面を設けた授業を行う。

③教員の指導力	
取組Ⅰ	児童の学習状況を座席シートなどによる記録を基にして授業評価をし、指導の改善を図る。
取組Ⅱ	管理職による授業参観を通して、経験年数や実態に応じた指導力の向上を目指す。
取組Ⅲ	教材研究や授業後の振り返り等のOJTを活発にするために、放課後の時間にゆとりをもたせるとともに毎月3回程度OJT研修会を設定する。

④家庭との連携	
取組Ⅰ	保護者会や学年便り等で学習状況や学校での取組を伝え、発達段階に応じて家庭での学習の協力を依頼する。音読や自主学習ノートなどへの押印や記入などを通して保護者の関わりを増やし、理解と協力を得る。
取組Ⅱ	夏休みの期間を活用し、家庭の理解と協力を得て、基礎的・基本的な学力の定着を目指した夏季学習教室を実施する。
取組Ⅲ	1学期末と2学期末の個人面談において児童の学力・学習状況について具体的な資料をもとにしながら成果と課題を学校と家庭で共有する。今後の指導の方針を明確にし、学校と家庭とで同じ方針をもって児童の指導にあたれるようにする。

⑤体力向上	
取組Ⅰ	「なわとび」は、6年間継続して使用するめあてカードを活用することで年間を通して各個人がめあてをもって取り組めるようにする。また、「なわとび」・「ペースランニング」の全校での大会を設定する。実施前に各自の目標をめあてカードに書き、期間を設けて集中して練習に励めるようにする。事後には振り返りをし、成果と課題、今後のめあてを自覚させる。
取組Ⅱ	本校のマイスクールスポーツである「なわとび大会」と「マラソン大会」の取組を公開し、家庭からの理解と協力を得て、児童の意欲喚起を継続して図る。
取組Ⅲ	体育朝会やなわとび朝会を月に1度設定し、記録向上を目指して練習に励む。



### 【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題
①学力基盤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一年間を通して「明正タイム」を活用した漢字・計算の反復練習や算数科の習熟度別少人数指導に取り組み、その結果、各種学力調査等では概ね良好な状態である。</li> <li>・児童が主体的に学びに取り組めるような学習展開にしたことで、話し合い活動や表現活動が充実した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的な状況は良好だが、低位層の児童の学力を向上させることが課題である。個別指導の時間を確保したり、習熟度別少人数指導のグループ分けの工夫をしたりする等の取組が必要である。</li> <li>・児童の学びに向かう力である課題発見力、課題解決力、意欲・関心等をさらに高める取組が必要である。</li> </ul>
②授業改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価（児童アンケート）における授業に関する項目でA B評価が95%以上であり、良好な状態と言える。</li> <li>・理科・生活科を中心とした校内研究「主体的に問題に取り組み、考えを深める児童の育成～児童自らが価値付けを行う指導の在り方～」を授業改善の柱とした。問題解決的な学習過程は、多くの教科等にも取り入れ、児童の主体的な問題解決が図られるようになってきた。また、児童自身が振り返りを通して、学びの成果と課題を価値付けたり、今後の学びを方向付けたりすることができるようになり、主体的に学習に取り組む態度の醸成や思考の深まりが見られてきている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の学習状況を適切に評価し、それを基にした授業改善を図るためにも児童に身に付けさせたい資質・能力の評価の在り方についてさらに理解を深める必要がある。</li> <li>・問題解決的な学習過程の型にとらわれず、児童の思いや願い、疑問に寄り添った学習過程を柔軟に採用していくことで、より主体的な問題解決の方向付けをしていく必要がある。</li> <li>・振り返りの在り方については、学年や教科、単元の実態に応じた様々な方法を検証し、知識・技能の高まりや主体的な学び、思考の深まりにつなげられるようにしていく必要がある。</li> </ul>

<p>③教員の指導力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価（教員アンケート）における学習指導に関する5項目で、A B評価は4項目が90%以上、1項目が80%以上であり、良好な状態と言える。</li> <li>・児童の学習状況を单元ごとに記録し、習熟度別のグループ編成や個別指導等に生かすことができたため、授業中に個に応じたきめ細かい指導を実施することができた。</li> <li>・管理職・教育センター講師による授業観察や日常的なO J T、任意参加型の校内若手育成研修会「プチ研修会」により若手教員を中心とした実践的な研修が実施できた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PDCA サイクルによる授業改善ができるようにするため、教師が児童の学習状況を適切に見極め、リフレクションを通して指導の改善を図ることで教員の授業力を高める。</li> <li>・授業観察や研修の前後に、教員が教材研究や指導計画の検討をしたり、研修の成果を実際の授業に生かすように振り返ったりする時間の確保が課題である。</li> <li>・研究授業に限らず日常の授業の相互参観を通して、児童理解・授業力向上の機会を生み出す時間と雰囲気醸成されてきているので、さらに充実させていくことが望まれる。</li> </ul>
<p>④家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者会や個人面談、通知表等で学習の状況を伝え、家庭学習の協力を要請することができ、協力を得られている。</li> <li>・家庭に夏季休業中の学習教室や個人面談期間の補習の実施について、意図と計画を説明し、児童参加の協力を得ることができた。</li> <li>・評価の観点と方法（評価場面や評価対象）を具体的に示した「通知表の見方」を通知表と同時に配布したことで、何ができて何が課題であるのかを詳細に理解してもらうことにつながった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間2回（7月・12月）の個人面談を通して、保護者に学習・生活面の情報（成果と課題、成長、今後の目標）を確実に伝え、学校と家庭とで同じ方針をもって弱点の克服にあたる必要がある。</li> </ul>
<p>⑤体力向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マイスクールスポーツである「なわとび」については、児童が卒業まで継続使用する「なわとびカード」を作成・配布し、個人のめあてを明確にした。毎月の体育朝会や体育の授業において個人のめあてをもって粘り強く練習に励む姿が見られるようになった。</li> <li>・もう一つのマイスクールスポーツである「ペースランニング」においては、体育の授業における10分間ランニング等の積み重ねを通して体力の向上を実感させることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで握力、ソフトボール投げについて平均を下回る学年が多かったが、今年度は20mシャトルランでも平均を大きく下回る学年が増えた。学年が上がると、鬼ごっこやドッジボールなどの体を動かす遊びをする児童が少ないことに加え、新型コロナウイルス感染予防対策として外で遊ぶ機会の減少が原因ではないかと考える。教員に向けて、握力や投力を鍛える遊びや運動（紙鉄砲やメンコのような遊びや、握力・投力の向上につながる活動）を伝える資料を配布し、実践を呼びかけることで児童の体力向上につなげる。</li> <li>・なわとびやペースランニングなどを計画的に取り入れ、持久力の向上を図る。</li> </ul>